

さくらじまの 海

2026年 第29巻 第4号

113



ハンドウイルカとゴマフアザラシ

水族館の仕事～海獣展示係～	2.3
いるかの時間・あざらしの時間「イルカ水路はどんな環境？」	4
ここがみどころ「4階 アカオビハナダイの赤ちゃん」	5
錦江湾のなかまたち「109. カミクラゲ」	5
アクアラボ「イルカの赤ちゃん誕生！ミルクを飲んで大きくなろう」	6
「鹿児島島の希少生物を守ろう 絶滅の危機に立つ生きものたち」	6
鹿児島サンショウウオ探索記	7
いおワールド通信	8
鹿児島 未知の魚を発見！「NO.42 イッテンホグロスジハゼ」	8

今回はイルカやアザラシの飼育展示を担当する海獣展示係を紹介します。

かごしま水族館の海獣たち

「海獣」とは海にすむほ乳類のことです。かごしま水族館にいる海獣は9頭のハンドウイルカと2頭のゴマフアザラシです（2026年2月現在）。

飼育をするうえで魚類と違うところは個体で管理をすることです。それぞれに愛称があり、人間と同じように見た目や体質、性格にも違いがあります。例えば、アザラシの「マスオ」は好き嫌いなくなんでも食べる印象ですが、「ゴマリン」はえさの魚に対して好き嫌いがあるようで、同じ種類の魚でも大きさや硬さによって食べない場合があります。そんなときは、よく食べるえさと苦手そうなえさを混ぜながら与えていき、苦手なえさに慣れてもらえるよう工夫をしています。このように、それぞれの個性に合わせて、工夫を凝らしながら飼育管理をしています。



かごしま水族館のイルカたち



左がマスオ 右がゴマリン

3つの「じ」

生きものの飼育では、3つの「じ」が大切だと言われています。えさの準備をする「調餌」、生きものにえさを与える「給餌」、飼育スペースをきれいにする「掃除」の3つです。

えさは健康状態に直接影響するため、細かいところまで気を配りながら準備をして与えています。また、飼育スペースをきれいに保つことも重要です。きれいな場所で展示することは、病気を防ぐとともに、生きものの魅力を最大限に引き出すことにもつながります。

健康管理

生きものの健康を守るためには、毎日の健康チェックが欠かせません。毎朝、給餌のときには体温測定を行い、体に異常がないかを確認をします。私たちの健康診断のように、イルカにも定期的な血液検査・胃液検査などを行います。これらの健康チェックにより、病気の早期発見や予防が可能になるのです。

そして、もう1つ大事なことが「ちょっとした違和感」に気づくことです。もともと野生動物である彼らは、体調が悪いときに身を守るため、弱っていることを隠すことが少なくありません。わずかな違和感や変化を見逃さないよう、日々観察力を磨いています。

行動の変化や検査結果などを総合的に判断し、必要な場合は治療を行います。



体温測定の様子

動物たちが刺激的な毎日を過ごせるように

水族館のプールは海と比べると単調な環境になりやすいので、私たちは常に動物たちに刺激をもたらす必要があると考えています。動物たちが退屈せず楽しく毎日を過ごすためにはどうしたら良いか、日々頭をひねらせています。プールに遊び道具を入れたり、ホースの水で遊んだり、いろいろな取り組みを行っています。



おもちゃで遊んでいるナーガ



水遊び中



図形を見分けるトレーニング

いるかの時間

私たちは、イルカやアザラシのことを多くの方に知ってもらうために、イベントや屋外施設「イルカ水路」でのイルカ展示を行っています。今回は館内イベント「いるかの時間」を紹介します。

「いるかの時間」は、イルカの生態や能力を直接皆さまに伝えられる貴重な機会です。「野生動物としてのイルカの本来の姿を知ってほしい、いのちの大切さを感じてほしい」という理由から「イルカショー」ではなく「いるかの時間」と名付けました。伝えたいことがより多くの人に理解していただけるように、大型画面を使った解説や、手話ワイプを採用しています。イベントの後に皆さまに感想や質問をいただくと、伝わったことが分かり、とてもうれしい気持ちになります。一番のやりがいを感じる瞬間かもしれません。

また、常に新しい情報を皆さまにお届けたく、年に1回内容を更新しています。テーマを決めた後は、シナリオの作成、大型画面に映す映像の作成、手話ワイプの撮影などを行い、1年以上かけて制作します。伝えたいイルカの能力を目に見える形で表現するために、イルカのトレーニングも同時に行います。新しいことを覚えるのは、イルカたちにとっても良い刺激になると考えています。



手話ワイプ収録の様子

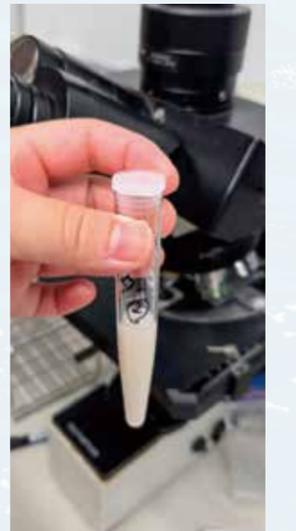
調査・研究

鹿児島湾（錦江湾）をはじめとする鹿児島周辺海域に生息する鯨類（イルカ・クジラ）の目視調査、海岸などに打ち上がった海獣類の調査などを行っています。これらの調査によって得られた知見を飼育に活かすことや、皆さまに発信していくことも大切な仕事の1つです。

また、大学や研究機関との共同研究も行っています。野生下の生きものから血液や便などの試料を採ることや、行動や繁殖についての研究には限界があり、飼育下で長期的な観察が可能だからこそ得られるデータもあります。水族館は研究の場としても大きな存在意義があります。



鯨類調査の様子



繁殖研究のため採取したオスのハンドウイルカの糞

おわりに

イルカやアザラシは見た目の魅力だけではなく、とても興味深い生態や能力を持ち合わせています。私たちの仕事を通じて、彼らの魅力が皆さまにも伝わり、海や自然環境のことを考えるきっかけになれば幸いです。（藤田 彩乃）

いるかの時期
あきらみの時期

イルカ水路はどんな場所？

当館には、屋外でイルカを見られる「イルカ水路」があります。イルカ水路は館内のプールと繋がっていて、水門を開けるとイルカが出入りすることができます。また、鹿児島湾（錦江湾）の一部でもあるため、季節によっては海藻が繁茂し、マダイやマアジ、キビナゴといったさまざまな魚を見ることもできます。



イルカ水路でジャンプするラスター

お客さまからよく「仕切りの網があるのに魚たちはどうやって入ってきているのですか」という質問をいただきます。魚たちは幼魚の頃に網の間もしくは網と壁のすきまから中に入ってきて、イルカ水路の中で成長して大きくなり、そのまま棲みついているようです。これまで100種以上の魚たちをイルカ水路で確認しました。季節によって見ることができる魚種も変わります。



イルカ水路で泳ぐメジナの群れ

海と繋がるイルカ水路には、生きものだけではなく人間が捨てたごみも入ってきます。イルカがごみを食べてしまうと、最悪の場合、命を落としてしまうこともあるため、毎朝飼育員がイルカ水路に潜って掃除をしています。しかし、海には数えきれないほどのごみがあるので、朝に掃除をしても、また新たなごみがイルカ水路に流れ込んでいきます。そのため、日中も飼育員が常に監視し、網を使って水面に浮いているごみを回収します。イルカ水路に入ってくるごみで特に多いのがビニール袋、ペットボトル、発泡スチロール、たばこの吸い殻などで、多い日はかご2つ以上のごみが集まることもあります。



水路で回収したごみの一部

このようにイルカ水路では、さまざまな生きものや海から流れてくるごみが見られます。外に捨てられたごみは川から海へと流れ、海の生きものたちに影響を及ぼしてしまうことがあるのです。海にごみがあることで海の生きものたちのくらしがどうなるのか、そしてイルカ水路とはどのような環境なのか、これからも伝えていきたいです。ぜひイルカ水路に足をお運びください。
(福元 優騎)



4階：アカオビハナダイの赤ちゃん

4階「かごしまの海」では、世界で初めて繁殖に成功したアカオビハナダイの赤ちゃんを期間限定で展示しています。アカオビハナダイは、西部太平洋に生息するハナダイ科の魚です。鹿児島湾（錦江湾）では比較的浅い水深で数百を超える群れが見られ、錦江湾を代表する魚の1つです。このアカオビハナダイが水槽内で産卵しているのを発見し、2024年に繁殖に取り組み始めました。初めはあまりうまくいかなかったため、2025年8月にさまざまな魚種の育成に実績のある神畑養魚株式会社と契約を結び、共同研究をスタートさせました。当館で産卵したアカオビハナダイの卵を集め、車で約2時間かけて鹿児島県南九州市の神畑養魚南九州養



体長約2cmのアカオビハナダイの赤ちゃん

殖センターへ運びます。初めて輸送した卵が順調に生育し、2か月後には一部が当館へ戻ってきました。このアカオビハナダイの赤ちゃんは2025年9月4日、5日に水槽内で生まれた卵からふ化し、神畑養魚株式会社で初めて育ったものです。2026年1月、ふ化から約4か月が過ぎました。体の色も濃くなり、メスの特徴である尾びれの両端の赤い模様もくっきりとしてきました。体長は約2cm、親の体長の3分の1ほどのサイズです。水槽の中を花びらが舞うかのように泳ぐ小さなアカオビハナダイの赤ちゃんの貴重な姿をぜひご覧ください。
(柏木 伸幸)



錦江湾のなかまたち

109. カミクラゲ

水温がぐっと下がる1月に出現するクラゲがいます。カミクラゲです。触手が髪の毛のようにたなびく美しいクラゲで、穏やかな港の中で触手を広げ、漂っています。寒くなるとカミクラゲ採集に出かけます。



カミクラゲ

この美しいクラゲをなるべく多くの人に見てもらうため、できることなら繁殖育成させて通年展示したいのですが、どのようにして繁殖しているのか、だれも見たことがありません。カミクラゲは謎の多い生きものです。カミクラゲを展示するに

は、現在は採集するしか方法がありません。

ところで不思議な話を聞きました。生きているカミクラゲからキュウリのおいがするというのです(吉田優花「カミクラゲの有するキュウリ様匂い物質の同定」, 2018)。キュウリのようなにおいがする海の生きものはキュウリウオをはじめいくつか知られており、カミクラゲもキュウリのような匂いの物質を持っていることが明らかになっています。しかしその理由はまだわかっていません。もしかしたら外敵から身を守る忌避物質として持っているのでしょうか。考えれば考えるほど謎が深まるばかりです。いろいろ調べてみたいのですが、貴重なカミクラゲをまずはお客さまに見ていただきたく、今日も海に出かけます。
(築地新 光子)



港に浮かぶカミクラゲ



イルカの赤ちゃん誕生！
ミルクを飲んで大きくなろう



ミルクを飲む様子

イルカは私たち人間と同じほ乳類です。赤ちゃんイルカの成長にはお母さんイルカのミルクが欠かせません。皆さんはイルカがミルクを飲んでる姿を見たことがありますか。イルカの乳首はお腹の後方の乳溝の中にあり、赤ちゃんイルカは泳ぎながらミルクを飲みます。泳ぎながらだとミルクが口からこ

ぼれたり、海水を飲み込んでしまいがちですが、そうならないためのひみつが舌にあります。赤ちゃんの舌の周りには葉状突起という花びらのような形のひだがあり、お母さんの乳首をしっかりと包みこむ役割をしています。



葉状突起

ユキの舌

イルカのミルクにはたくさんの栄養が含まれています。特に脂肪分が多く、人間のミルクと比べると約10倍もあります。この高カロリーのミルクを飲むことで、赤ちゃんはイルカらしいふっくらとした体形に成長していきます。

アクアラボでは2025年2月に生まれたユキの成長の様子を織り交ぜながら紹介しています。日々成長するユキの今しか見られない姿もあわせてぜひ見に来てくださいね。(藤本 彩香)

とくべつきかくてん
特別企画展
かごしま きしょう
鹿児島島の希少生物を守ろう
ぜつめつ きき
絶滅の危機に立つ生きものたち
2026年3月13日(金)～6月7日(日)

「絶滅危惧種」という言葉を知っていますか。さまざまな理由から数が少なくなり、将来的には絶滅してしまう可能性がある生きものなのです。豊かな自然が残る鹿児島。しかし、そんな鹿児島でも人知れず姿を消そうとしている生きものが数多くいます。今回の特別企画展では鹿児島に生息する希少生物を紹介します。

今回展示している生きものは、すべてがIUCN(国際自然保護連合)あるいは環境省により絶滅の危険性があるとされた種です。

なぜこれらの生きものが絶滅の危機に瀕しているのでしょうか。理由の1つとして鹿児島という地域の特異性が挙げられます。鹿児島にはどのような特異性があるのか、なぜいろいろな生きものが棲んでいるのかをぜひ会場でご覧ください。

また、私たち人間が生きものに与える影響は非常に大きなものです。私たちのどのような行為が



キバラヨシノボリ

生きものを絶滅に追い込んでしまうのか、今回はゲーム感覚で体験しながら知ることができます。

消えてしまいがちな生きものがあることを知るところから、生きものの保護は始まります。希少な生きものを守るために私たちは何をしたらよいのか、考えてもらうきっかけとなればうれしいです。(広瀬 純)

「サンショウウオ」と聞くと、大きなオオサンショウウオを思い浮かべる方も多いかもしれませんが、鹿児島県に生息している種は成体(おとな)でも15cmくらいの小型のサンショウウオです。どちらも有尾目(しっぽがあるのが特徴)の両生類で、幼生(こども)のころは顔の横についたえらで呼吸し、水中ですごします。成長するとえらがなくなり、小型種の多くは水から出て、森の中の落ち葉の下や土の中などでクモなどの小さな生物を食べてひっそりと喜ばします。



ベッコウサンショウウオ幼生



ベッコウサンショウウオ 亜成体
(陸上生活をしているがまだ成体ではない)

私とサンショウウオとの初めての出会いは小学生のころ、茨城県北部の近所の川で行われていた生物観察会でした。分布域から推定すると、バンダイハコネサンショウウオだったと思われそうですが、どんな姿だったか、当時の記憶はあいまいです。しかし「いた!」という驚きと興奮は、今でも強烈に記憶に残っています。その後も本州に生息するサンショウウオの幼生には何度か出会う機会がありましたが、野生下の成体にはなかなか出会うことができませんでした。

鹿児島で私が初めて出会ったのは、大隅半島の山地にのみ分布している希少種、オオスミサンショウウオの幼生でした。久しぶりのサンショウウオとの再会、しかも鹿児島県内で!大変うれしかったのは言うまでもありません。



オオスミサンショウウオ幼生

今回、県内の希少な生物をテーマにした特別企画展に携わることになりました。県内で見られるサンショウウオ4種類を展示すべく、採捕許可を申請のうえ、外部機関の方のご協力もいただき、採集のチャレンジが始まりました。探すのに最も苦労したのはコガタブチサンショウウオです。本種は山地の伏流水中で幼生期を過ごすため、幼生はまず見つけることができません。そのため、森の中で成体を探ることになるのですが、なかなか見つかりません。過去に確認された記録がある場所で、1日中ひたすら倒木や石をひっくり返し続けます。タゴガエル、サワガニ、クモのなかま・・・他の生物はどんどん見つかかり、写真を撮りためていたら立派な土壌生物図鑑が作れたのでは?と思いましたが、それでもサンショウウオは発見できませんでした。

まったく見当違いの探し方をしているかも、と心配になりつつ、何回目のチャレンジだったでしょうか。秋も深まり、山間部では冬の気配も漂ってきたところで、いつもの場所に着くと、鹿児島市内よりかなりひやっとした空気、林床には落ち葉がたくさん落ちています。いつもと違うぞ、と感じながら探すこと1時間。唐突に、まさに思い描いていた通りのもので、倒木の下に身をひそめるコガタブチサンショウウオの成体を見つけました!うれしさのあまりに出た「いたあ!!!」という叫び声は、森中に響き渡っていたと思います。やっと見つかった安心感とともに、大切に水族館へと連れ帰ったのでした。



コガタブチサンショウウオ成体を発見



やっと見つけた!
うれしい!筆者

この後、同種が2個体見つかかりました。本号が皆さまの元に届くころには、採集したサンショウウオを見ていただく特別企画展が開催されています。彼らが棲む鹿児島の環境の豊かさや、彼らの美しさが皆さまに伝わればいいなと思います。(菊地 一真)

海のうんちく

かごしま水族館では、新しい展示「海のうんちく」をスタートしました。館内5カ所のトイレに、海の生きものたちの「トイレ事情」を紹介する解説パネルを掲示しています。各トイレには3種類ずつ、合計15種類のうんちくを用意しました。陸上動物と違い、海の生きものの排泄は想像しにくいものですが、体からいらぬものを「出す」ことは大切で、その点は私たち人間と同じです。そんな「生きもの共通の営み」を楽しく知ってもらうことが今回の展示の目的です。トイレに行く時間も楽しみのひとつとして、「ふーん」とつぶやいてもらえたらうれしいです。



(柏木 由香里)

“うみ・ふね・さかな” 魅力発信プロジェクト

12月6日に「ぎょ!ギョ!魚!鹿児島水産高校がやってきた!ここでしかできない学校体験!」として、水産や海洋教育への興味と関心を深めていただくことを目的に、県内で唯一の水産・海洋系高校である県立鹿児島水産高等学校の海洋科・情報通信科・食品工学科で学ぶ生徒の皆さんと体験イベントを行いました。アマモやイカの研究・実習に関する展示・解説、海の魅力を伝える紙芝居、ミサンガやシェルマグネットなどの物づくり体験、モールス信号の実演などを行いました。来館されたお客さまが、海の生きものだけでなく、水産や海洋に興味を持っていただくきっかけづくりになりました。



物づくり体験



モールス信号の実演

(大瀬 智尋)

編集後記

進学や就職などで新たなスタートを切る方も多いのではないのでしょうか。離島を抱える鹿児島県では、船乗り場で離任する教員の方々との別れを惜しむシーンがこの季節の風物詩となっています。感謝の言葉とエールを送り、恩師を送り出す光景は何度見ても心に沁みるものがあります。その一方で気候も徐々に温暖になって、桜の開花宣言が聞かれるようになり、気持ちが明るくなってくる季節でもあります。少し気になって調べてみると、一言に桜と言っても多くの品種があり、種から花を咲かせるまで10年ほどかかるものもあるようです。一昨年加茂水族館との姉妹館盟約10周年を記念して両館に植樹されたヤマザクラが咲くのはもう少し先の春になりそうです。

(三重 拓)

シリーズ 鹿児島 未記の魚を発見!

No.42 イッテンホホグロスジハゼ

インド・西太平洋に広く分布するホホグロスジハゼを形態的・遺伝的に調査したところ、2種が含まれていたことが明らかになり、2025年11月にホホグロスジハゼに近縁なイッテンホホグロスジハゼ *Acentrogobius nigromaculatus* が新種として記載されました。本新種は第2背鰭の前端にある明瞭な1黒色斑が特徴で、標準和名と学名はこの黒色斑に由来します。イッテンホホグロスジハゼは砂混じりのやや硬い泥干潟に、ホホグロスジハゼは粘土質の柔らかい泥干潟に好んで生息します。イッテンホホグロスジハゼは鹿児島県内では薩摩半島や屋久島、奄美大島から記録されています。



イッテンホホグロスジハゼ *Acentrogobius nigromaculatus*



ホホグロスジハゼ *Acentrogobius suluensis*

(鹿児島大学総合研究博物館 館長 本村 浩之)

